

まえがき

本書は、明治天皇（一八五二—一九一二）が赤坂仮皇居時代に「御会食所」と呼ばれた場所で行った宮中外交を「建築」「テーブルアート」「人物」という三つの視点から読みとくものである。

明治天皇とその皇后である昭憲皇太后（一八四九—一九一四）の饗応の舞台とその様子を、多方面から検証していく前例のない試みとなるものだが、まず、本論をよりスムーズに理解していただくために二つの歴史的変遷について説明しておきたい。

ひとつは、明治天皇の住まいについて。

もうひとつは、明治外交の舞台についてである。

* 明治天皇、四つの住まい

先ほど「明治天皇が赤坂仮皇居時代に」と書いたが、この「赤坂仮皇居」とは、明治天皇にとって三つ目の住まいとなった場所である。

明治までの天皇は、数例を除けば、あまり人前に現れることはなく、その生涯を京都御所だけで終えることがほとんどであった。

明治天皇も、世が江戸幕府体制のまま移ろえば、近世の天皇と同じように、その生涯を京都御所のなかで終えたことであろう。

しかし、明治維新という時代の大転換が起こり、明治天皇は生涯を通して四つの場所に住まうことになる。

ひとつ目の住まいは、京都御所である。

明治天皇は、嘉永五年（一八五二）に京都御所内の御産所おんうぶしよで生まれ、江戸の世が終わるまで、ずっと京都御所から出ることはなかった。

しかし、明治になると、新しい世の到来を示すために「行幸」と呼ばれる天皇の外出が、頻繁に行われるようになる。

天皇の初めての行幸は、明治元年に京都の二条城にて、新政府の総裁である有栖川宮熾仁たるひと親王に旧幕府軍の追討令を出す際に実現した。

そして同年、明治天皇は東京行幸により江戸城に入城。翌年から、この地が明治天皇の新たな住まいとなった。

しかし、明治天皇は、この二つ目の住まいから慌ただしく立退くことになる。明治六年（一八七三）五月五日、皇居宮殿として使用されていた旧江戸城の西ノ丸御殿が、女官部屋からの出火により焼失したためである。

この際、明治天皇と皇后が緊急避難し、そのまま仮の住まいとして定められたのが、三つ

目の住まいとなった赤坂仮皇居である。

この地は、もともと紀州徳川家の江戸屋敷えどやしきがあつた場所で、この地に仮皇居を定めたことから、以降この住まいは「赤坂仮皇居」と呼ばれることとなる。

明治天皇は、この赤坂仮皇居に、明治六年五月五日からおよそ十六年にわたって住み、明治二十二年一月、新しくできた明治宮殿に引っ越すことになる。

この明治宮殿が、明治天皇にとって最後となる四つ目の住まいとなった。この宮殿は、旧江戸城の西ノ丸に和洋折衷の木造建築として建てられたもので、明治二十二年二月の大日本帝国憲法発布式もここで行われた。明治天皇だけでなく、大正天皇、昭和天皇も居所とした明治宮殿だが、第二次世界大戦の末期、昭和二十年（一九四五）五月の東京空襲の際に類焼して、そのすべてを焼失している。

なお、余談になるが、明治宮殿の次なる宮殿が作られたのは、昭和三十六年のこと。昭和天皇は、「国民の復興が先」と、宮殿の造営を認めず、この間、防空壕だった御文庫で過ごしている。

* 明治外交、三つの舞台

さて、本書を読みとく上で重要な「赤坂仮皇居」の位置づけは、おおそ理解いただけたであろうか。続いては「御会食所」の概要を理解していただくため、明治宮殿が完成する以

前、すなわち赤坂仮皇居時代の明治外交の三つの舞台について解説したい。

ひとつめは明治十六年、日比谷に作られた「鹿鳴館」。設計者は日本建築界の父と呼ばれるジョサイア・コンドル（一八五二—一九二〇）である。

おそらく「明治外交の舞台」と聞いて、多くの人が真っ先に名前を思い浮かべるのがこの鹿鳴館ではないだろうか。外務卿であった井上馨（一八三六—一九一五）の発案で作られたこの社交場では、当時の日本外交の課題であった不平等条約の改正のため日本が文化的にも欧米に近い先進国であることを示そうと、外交官たちを招いての夜会がたびたび催された。

ただ、急ごしらえの洋風接待は、外国人からの評判もよくないうえ、国内からも「退廃的行為」などと少なからぬ悪評に晒された。この鹿鳴館で饗宴が催されたのは、井上馨が外務卿を辞任する明治二十年までと、その期間は四年あまりにすぎない。それにも関わらず「明治外交Ⅱ鹿鳴館」という印象が強いのは、この芳しくない評判ゆえであろう。なお、鹿鳴館は明治二十三年に宮内省に払い下げられ、昭和十五年にはその建物も取り壊されている。現在は、東京都千代田区の帝国ホテル近くに、その跡を示す石碑を見ることができる。

ふたつめは「延遼館」である。

明治二年の春、英国公使パークスは、夏にイギリス王国の第二王子・エジンバラ公がアジア歴訪の途上、日本に立ち寄ると政府に告げる。ここから明治政府にとって初めての国賓接待が始まるのだが、これに際して宿泊施設が作られることになった。場所は、江戸時代には

徳川將軍家の別邸「浜御殿」があった現在の浜離宮恩賜庭園。ここに当時あった海軍施設「石室」を改修し、調度品を整えてエジンバラ公をもてなす宿舎とした。これが「延遼館」と名付けられ、こののち、外務省の管轄となって、国賓の接遇や宿泊の施設、饗応などに用いられるようになる。

この後、明治十六年に鹿鳴館ができると、延遼館は外務省から宮内省に移管される。ここから外務省は鹿鳴館を、宮内省は延遼館を外交接待に用いることになる。

この鹿鳴館、延遼館とならぶ三つめの明治外交の舞台が、本書の主役となる「御会食所」である。

御会食所は、明治天皇の三つめの住まいとなった赤坂仮皇居に明治十四年十月に作られたものである。

明治時代、皇居のなかでは、天皇との対面がさまざまな機会に行われた。

年頭の新年拝賀においては、天皇と高級官僚や有位有爵者との主従関係が「拝賀」という行為のなかで確認された。また各国の外交官に対しては、その着任、離日に際して宮中で天皇への謁見が許され、外国の皇族が来朝した際には宮中での天皇との対面がセッティングされている。

宮中ではこうした天皇との対面の他に、より親密な関係を示すものとして、天皇と食事を共にする「御会食」という機会がしばしば設けられた。

明治天皇の御会食には、身内である皇族方との祝い事に際して皇后や皇太后（英照皇太后）と開くごくプライベートなものから、年中儀式として行われる三大節賜宴（新年宴会、紀元節賜宴、天長節賜宴）や外賓が来朝した際の宮中晩餐会といった国家儀礼まで多様なケースがあった。そこでは天皇と会食の相手との「距離」や「親密さ」が、会食の形式や食事の内容によって表現された。

御会食所は、赤坂仮皇居という臨時の住まいに不足していたこのような「御会食」を催すため、天皇専用のダイニングホールとして作られたのである。

外観は和風意匠でありながら、内部は洋風の要素を取り入れた和洋折衷の大空間の建物で、設計者は宮内省の技師・木子清敬（きこきよよし一八四五—一九〇七）。木子は、明治二十二年に竣工した明治宮殿の設計者としてよく知られる人物である。

明治天皇が赤坂仮皇居で過ごした明治六年五月から明治二十二年一月までは、西南戦争を代表とする内乱の鎮圧、幕末に諸外国と締結した不平等条約の改正、大日本帝国憲法の制定と国会開設といった、近代国家としての体制整備が急ピッチで進められた時期であった。天皇との「御会食」には、これらの課題をスムーズに解決するための触媒のような役割も期待されていた。

ちなみに「御会食所」があった赤坂仮皇居の場所には、現在、「迎賓館赤坂離宮」が建っている。この建物は、もともと嘉仁親王（よしのひとのちの大正天皇）の住居、すなわち「東宮御所」とうぐうごしよ

として作られたもので、明治三十二年に着工し、十年後の明治四十二年に竣工している。設計者は、宮廷建築の第一人者である片山東熊（とうくま一八五四―一九一七）である。

この迎賓館赤坂離宮の場所にあった「御会食所」と「鹿鳴館」そして「延遼館」の三つが、明治宮殿誕生以前の日本外交を支えた舞台なのである――。

* 今なお残る「御会食所」

本書を読みとくうえで知っておいていただきたい「明治天皇、四つの住まい」と「明治外交、三つの舞台」について、おおよそご理解いただけたであろうか。

では、この「はじめに」の最後に本書でなぜ赤坂仮皇居にあった「御会食所」にスポットを当てたのか、その最たる理由をご説明しておきたい。

それはこの建物が、今もなお、誰もが訪れることができる場所に残っていることにある。その場所を「明治記念館」という。

明治記念館は、明治神宮外苑の一角である東京都港区元赤坂二丁目にあり、総合結婚式場としても広く知られる場所であるが、この本館こそ「御会食所」の建物、そのものである。

明治宮殿が完成し、明治天皇と皇后が赤坂仮皇居から移られると、同地には皇太子の居所となる「東宮御所」が作られることになった。これにより「御会食所」は、いったん、解体されるも、その後、移築されることになる。

移築先は、当時、伊藤博文邸のあった現在の品川区大井。「御会食所」は、ダイニングホールとしてだけでなく、大日本帝国憲法の草案を審議する枢密院会議の場所としても利用されていたため、この枢密院の議長であった伊藤に下賜されたのである。伊藤は、この建物を「恩賜館」と名付け、応接などに用いた。

明治四十二年に伊藤博文が亡くなり、時代が大正に移って明治神宮外苑の造営が計画されると、伊藤博文の息子の伊藤博邦から明治神宮にこの「恩賜館」が奉納されることとなった。このとき、この建物は過去の経緯にちなんで「憲法記念館」と改名される。

そして戦後となる昭和二十二年に、同館は「明治記念館」として新たな歩みを始め、現在にいたっている。

このように「御会食所」の建物は、いったん、元赤坂の地を離れた後、道路を挟んだ先にある元赤坂の隣地に戻ってきたのである。

現在、明治記念館では、数多くの結婚式やパーティーが催されているが、この建物があるような歴史を経てきたことを知る人は少ない。今も披露宴が行われる部屋で、明治天皇と昭憲皇太后が食事をし、伊藤博文らが憲法の審議をしたことに思いを馳せる人も少ない。

しかし、現在の明治記念館の本館は、明治時代、幾多の歴史的舞台となった貴重な遺構なのである。

そこで本書では、この「御会食所」の新たな評価へとつながる一歩として、建築、テーブルアート、人物にスポットを当て、明治という時代の理解を深めることを目指した。

来年、平成三〇年（二〇一八）は、明治維新からちょうど百五十年の節目の年。少しでも多くの方に、明治という時代の実像を感じ取っていただければ幸いである。

天皇のダイニングホール 知られざる明治天皇の宮廷外交 目次

まえがき

序章 明治天皇の御会食にみられる三つの機会とその内容 1

山崎鯛介

天皇の御会食に見られる三つの機会／「おごそかな和食屋簀会」として行われた三大節賜宴／来朝した各国皇族との御会食／大臣・参議および各国公使との御陪食

第一章 交流の建築 御会食所のデザインにみる「復古」と「近代」の二面性 19

山崎鯛介

一、既存建物のリノベーションとその空間 25

西ノ丸皇居における儀礼形式の確立／赤坂仮皇居への移転と既存建物の改修／空間の使い方 朝儀（新年拝賀と三大節賜宴）の場合／空間の使い方 国賓接待の場合

二、御会食所の設計意図 39

最初に計画された謁見所・会食所「併設案」／設計変更による会食所への特化／竣工時の御会食所に見られる和洋折衷の室内意匠／「復古」を強調した京都御所風の意匠

三、明治十九年に行われた床仕上げの大改修 53

儀礼空間を対象とした床仕上げの大改修／婦人の洋装化と洋風晩餐会への洋装皇后の同席／新年
拝賀に導入された新しい形式「列立拝賀」

第二章 食卓の外交 〈明治天皇の洋食器と意匠をめぐる戦略〉 61

メアリー・レッドファーン（林美和子 訳）

一、食卓の用意 64

諸国酒宴に参加した日本／外交の小道具 宮中の洋食器／「西洋の」食器

二、御会食所の初日 81

明治八年に注文された英国製の洋食器／明治十四年に来日した英国の王子たちとの饗宴／天皇の戦略

三、御用食器の新古模様 105

御会食所のための国産宮中洋食器／「天皇」のためのデザイン／明治天皇の食卓を越えて／器の絆

第三章 饗宴の舞台裏 〈人物で読む明治宮殿誕生前夜の宮中外交〉 129

今泉宜子

一、ドレスと勲章 〈皇后のディプロマシー〉 133

御会食所の皇后ことはじめ／皇后の洋装化／女の勲章／明治宮殿への登場

二、条約改正への道 〈シーボルト兄弟が見た明治外交〉 156

不平等条約というくびき／アレクサンダーとハインリヒの日本／井上馨外相時代の改正交渉とアレクサンダーの奔走／遠い夜明け

三、明治天皇の料理番　く大膳職を支えた人々く　177
「本格」未満の時代／宮中洋食はじめて物語／秋山コレクションに見る御会食所の午餐・晚餐／「食」
のお雇外国人と海を渡った大膳職

あとがきにかえて

■ 付録

「天皇のダイニングホール」を訪れた人々　く赤坂仮皇居御会食所の利用年表く

注

図版所蔵先・出典一覧

人物索引

あとがきにかえて

本書は、明治十年代から二十年代の初頭にかけて皇室外交の舞台となった「天皇のダイニングホール」、赤坂仮皇居の御会食所とその時代を論じた共著書である。当時の御会食所の建物は、今も明治記念館本館として現存する。その意味で本書は、明治天皇が使用した宮殿建築唯一の遺構である同館について、その歴史と文化的意義をまとめた最初の著作でもある。

第一章は、日本近代建築史を専門とする山崎鯛介が執筆した。山崎は、赤坂仮皇居御会食所の建設過程を検証し、その設計意図と改修経緯、儀礼空間の形成過程について考察を加えた。第二章は、日本近代美術史の研究者であるメアリー・レッドファーンが担当した。レッドファーンは「食卓の外交」をテーマに、御会食所時代に発展をとげた宮中洋食器について、そのデザイン成立過程の一端を明らかにした。第三章では、今泉宜子が比較文化的な観点から、黎明期の宮中外交を支えた人物たちに焦点をあてた。

刊行にあたっては、多くの方々にご指導・ご協力をいただいた。企画からデザイン・編集にいたるまで、岡部敬史氏とサトウミユキ氏には終始心強いサポートをいただいた。また、

第二章の翻訳は、林 美和子氏の丁寧かつ献身的な仕事があれば、時間の制約のなかで完遂することは不可能だった。そして、思文閣出版新刊事業部の原 宏一氏、田中峰人氏には、本書の出版について、格別のご理解とご高配を賜った。ここに特記して謝意を表する。とくに田中氏には、度重なる執筆の遅れとスケジュールの調整で、ご迷惑も数多くおかけした。この場を借りてお詫びを申し上げるとともに、辛抱強く励ましてくださったことに心よりお礼を申し上げたい。

明治記念館は、終戦後の昭和二十二年（一九四七）に明治神宮の総合結婚式場として開館してから、本年十一月一日で七十周年の節目を迎える。この記念の年まわりに本書の出版が実現したことを僥倖とし、お世話になった関係各位には感謝の意を表するとともに、ひとりでも多くの方々に本書を手にとっていただければ幸甚である。

平成二十九年九月

今泉宜子

深川忠次……123
 ブキャナン、ジェームス……69,70
 福沢諭吉……70～72,75
 福島隆……192,194
 フォードロヴナ、マリア（ロシア皇后）……150～152
 プラームス、ヨハネス……164
 ブリーン、ジョン……149
 フレイザー、メアリー・クロフォード……100,194
 ベーコン、アリス……155
 ベール、サミュエル……186
 ペール、ジャン……186
 ベグユー、ルイ……181,183
 ヘス、カール・ヤコブ……181
 ペリー、マシュー……72
 ベルツ、エルヴィン・フォン……135,154
 ベルナード（ドイツ国ザクセン＝ヴァイマル公族）
 ……11,140
 ヘレーネ（ヘレーネ・シーボルト）……159
 ボアソナード、ギュスターヴ・エミール……173
 ボアンヴィル、シャルル・アルフレッド・シャステル・デ
 ……39,51
 ボナ、L……185

ま

船居宏枝……140
 松岡立男……185,186
 松平春嶽……26
 美智子皇后……210,211
 ミットフォード、アルジャーノン・B……73
 ミハイロヴィチ、アレクサンドル……11,151,152,187,200
 陸奥宗光……157,211
 村垣範正……69
 村上光保……186,187
 明治天皇……i～iii,v～viii,2,4～9,13,14,16,17,20,22,
 23,25,27,30,31,34～38,43,44,48,51,55,56,62,63,73
 ～77,79～83,85～88,90,92～95,97,99～106,109～
 111,113～115,117～121,124～127,130～132,135～
 138,145,149,153～155,158,162,171,175,177,179,180,
 182～186,193,201,208,210,212,213
 モール、オットマール・フォン
 ……12,58,142,145,187～189,197,201
 元田永孚……52

や

柳原前光……52,143
 山川操……142,143,145
 山川三千子……144
 山崎鯛介……161,166
 山田顕義……173
 吉井友実……52
 吉雄幸作……67
 吉川兼吉……182
 吉田菊次郎……205
 吉村晴雄……202,203,205～209,212

ら

ライス、シャルル……207
 ランシアレス、E・マルタン……169
 リスト、フランツ……213
 ルイ・フィリップ一世……114
 ルイ十五世……93,113
 ルイ十六世……93,113
 ルマニエール、ニコル・クーリッジ……64
 レオポルト、フリードリヒ……11,55,138,140,187
 レメーニ、エドゥアルト……137,164,213
 ローゼン、ロマン……169
 ロケット、ギヨーム・ド……169
 ロシア皇太子ニコライ……152,153
 ロッシュ、レオン……186

わ

ワグネル、ゴットフリード……107
 和田英作……154
 渡辺鎌吉……181,183

コンノート親王……208

さ

佐佐木高行……52

ザッペ、エドゥアルト……171,173

サトウ、アーネスト……159

佐野常民……160

ザルスキー、カール……137,163,164

澤護……186

三条実美……8,25

シーボルト、アレクサンダー

……158~162,165,167,168,170~176,182,211

シーボルト、ハインリヒ

……158,160,161,163~165,167,172,175,211,213

シーボルト、フィリップ・フランツ・フォン……158~160

シェービチ、ドミトリー……140,151

ジェノバ公……9,10,36,37,76,78

塩田三郎……166,167,170

シドモア、エリザ……155

シブースト……205

シュヴェ夫妻……204

昭憲太后(皇后)……i,ii,vi,viii,2,4,10,12,20,22,23,30,
31,34,55,59,62,75,77,120,131,133~144,146~155,162
~164,184,210,211,213

昭和天皇……iii

ジョージ王子(英国皇太子、ジョージ五世)

……10,81,92,96~103,190

ジョージ五世 ▶▶▶ ジョージ王子

ジョージ四世……94

スクライブ、F・G……169

た

大正天皇(嘉仁親王)……iii,vi,4,20,177,178

ダヴィドフ、アレクサンドル……200

谷干城……173

ダルトン、ジョン・ニール……96

チャリネ(ジュゼッペ・キアリーニ)……138

辻喜右衛門(三代)……109

辻喜平次(六代)……109

辻喜平次(十代)……109

辻勝藏(十一代)……11 79,109,110

津田梅子……145,146,156

テイラー、ウィリアム……86

デヴァウォングセ(タイ国特命使臣)……11,187

デヴェット ▶▶▶ ルイ・ドゥエット

手塚亀之助……110

寺島宗則……16,165,183

デロング、チャールズ……76,156

ドイツ国皇孫(アルベルト・ヴィルヘルム・ハインリヒ)

……36,37,39

ドゥエット、ルイ(デヴェット)……12,198~202,207

徳川昭武……159

徳川慶喜……72

トリゲロス、ルイス・デル・カスチロ(スペイン公使)

……193,195

ドルレアン、アンリ・マリー・フィリップ……11,140,190

な

長崎省吾……146,187,188

中山慶子……73

鍋島直大……142

ナポレオン、ルイ(イタリ王国皇孫)……11,12,137

新見正興……70

西五辻文仲……184,185,201

西尾益吉……182,196

西徳二郎……152

は

パークス、ハリー・スミス……iv,16,169

ハインリヒ親王(ドイツ帝国皇孫)……9

バスカラウォングス、フィヤ……201

蜂須賀茂韶……206

バルトーク、ペーラ……213

ピートン、イサベラ……64,75

東伏見宮 ▶▶▶ 小松宮彰仁

ビンガム、ジョン・アーマー(米国公使)……16,136,195

フェルディナント、フランツ……164,165,208

フェルディナント、レオポルト……7,11,164,187

深海墨之助……110

深川栄左衛門……110

人物索引

あ

アイゼンデッヒャー、カール・フォン……169,171
アウグスト、オスカル・カール (スウェーデン国皇子)
……11, 136,187
青木エリザベート……10,146
青木周蔵……146,170
青柳義幸……192,194
秋山徳蔵
……99,177~179,182,189,190,192,195~197,209,212
芥川龍之介……130,131
麻見義修……122
アシュバーナム (第四代)……87
有栖川宮威仁……152,153
有栖川宮熾仁……ii,36
有栖川宮熾仁妃……154
有馬文伸……67
アルフレート ▶▶▶ エジンバラ公
アルベルト・ディ・サヴォイア、トンマーゾ……8
アレキサンドロヴィッチ、アレキシス……8
アレクサンドラ (デンマーク王女)……91
アレクサンドル三世……151,152
安藤勉……165
五百旗頭薫……165
五辻安伸……122,201
伊藤梅子……146,147
伊藤博邦……viii
伊藤博文……viii,12,20,127,135~139,146,151,171,174,
182,187,200
井上馨
……iv,6,12,15,16,130,131,157,158,162,163,165~176,211
井上毅……173
井上武子……10
岩壁義光……133
岩倉具定……207,208
岩倉具視……52,156,181
ヴィクター、アルバート (英国皇太子)
……10,81,92,96~103,190
ヴィクトリア女王……81,86,91,94,96,103
ヴィルヘルム、フリードリヒ……11,145,188
植木淑子……140,141
上野広一……167
歌川芳員……68

英照皇太后……vi
エジンバラ公 (英国皇子、アルフレート)……iv,v,7,8,73
エスコフィエ、オーギュスト……195,196,204,205
エドワード七世 (ウェールズ公)……91
大久保利通……156
大隈重信……174
大槻玄沢……67
大山巖……143,145
大山捨松……145,147
オールコック、ラザフォード……159
刑部芳則……135
オン、エド……207,208

か

香川敬三……137,143,206,208
香川志保子……142,143,145
片山淳之介……71
片山東熊……vii
仮名垣魯文……180
カラカウア (ハワイ国皇帝)……10,37,38
幹山伝七……79,106,108,109
木子清敬……vi,40
木子幸三郎……40
喜多川歌麿……67
北島以登子……142,143,145,164
北白川宮能久妃……154
北村重威……181,183,184
木戸孝允……73,74,156
キヨッソーネ、エドアルド……148
草野丈吉……180
久米邦武……92,114
クライナー、ヨーゼフ……167
グラント、ジュリア・デント……119
グラント、ユリシーズ・S……9,39,119~121
栗野慎一郎……211
グリフィス、W・E……27
小出光照……143
孝明天皇……212
コダーイ、ゾルターン……213
小松宮彰仁 (東伏見宮)……97,108,137
小村寿太郎……157
コンドル、ジョサイア……iv

著者略歴

山崎鯛介 ● Taisuke Yamazaki

東京工業大学環境・社会理工学院准教授

1967年埼玉県生。1990年、東京工業大学工学部建築学科卒。1992年、同大学院理工学研究科建築学専攻修士課程修了。早川正夫建築設計事務所、東京工業大学工学部建築学科助教、千葉工業大学工学部建築都市環境学科准教授を経て、2013年より現職。「明治宮殿の意匠的特徴とその形成過程」で東京工業大学博士（工学）を取得。「明治宮殿の建設経緯に見る表宮殿の設計経緯」で2005年日本建築学会奨励賞受賞。主な論文に「西ノ丸皇居・赤坂仮皇居の改修経緯に見る儀礼空間の形成」（『日本建築学会計画系論文集』591号、2005年）、「『憲法記念館略史』に見る明治10年代の宮殿の風景」（明治神宮編『明治神宮叢書』第19巻、国書刊行会、2006年）、「初期の復興小学校のデザインについて」（『明石小学校の建築－復興小学校のデザイン思想』共著、東洋書店、2012年）等がある。

メアリー・レッドファーン ● Mary Redfern

チェスター・ピーティアー・ライブラリー東アジアコレクション学芸員

1982年英国生。2004年にエジンバラ大学で考古学、2008年にはレスター大学で博物館学の修士号をそれぞれ取得。アシスタント・キュレーターとしてブリストル市立美術館、ヴィクトリア&アルバート博物館、スコットランド国立博物館で勤務。2015年から現職。2016年イースト・アングリア大学から、明治期日本の宮中における御用食器の発展に関する学位論文（'Crafting Identities: Tableware for the Meiji Emperor'）で博士号（美術史）を取得。近著に 'Minton for the Meiji Emperor' in *Britain and Japan: Biographical Portraits* vol. X, ed. Sir Hugh Cortazzi (Folkestone: Renaissance Books, 2016), 'Getting to Grips with Knives, Forks and Spoons: Guides to Western-Style Dining for Japanese Audiences, c. 1800-1875' (*Food and Foodways* 22/3, 2014) 等がある。

今泉宜子 ● Yoshiko Imaizumi

明治神宮国際神道文化研究所主任研究員

1970年岩手県生。東京大学教養学部比較日本文化論学科卒業後、雑誌編集者を経て、國學院大学で神道学を専攻。2000年より明治神宮に所属。2007年、ロンドン大学 SOAS において明治神宮に関する学位論文で博士号（学術）を取得。現在、国際日本文化研究センター客員准教授を兼任。著書に『明治神宮 戦後復興の軌跡』（鹿島出版会、2008年）、『明治神宮「伝統」を創った大プロジェクト』（新潮社、2013年）、*Sacred Space in the Modern City: The Fractured Pasts of Meiji Shrine, 1912-1958* (Brill, 2013)、『明治日本のナイチンゲールたち』（扶桑社、2014年）、共著に『東京のリ・デザイン』（清文社、2010年）、『明治神宮以前・以後－近代神社をめぐる環境形成の構造転換－』（鹿島出版会、2015年）、『海賊史観からみた世界史の再構築』（思文閣出版、2016年）等がある。

記者略歴

林 美和子 ● Miwako Hayashi Bitmead

1974年岐阜県生。2009年、ロンドン大学 SOAS 美術史・考古学修士課程修了。現在、英国のセインズベリー日本藝術研究所に勤務。

てんのう
天皇のダイニングホール
し めい じ てんのう きゅうていがいこう
～知られざる明治天皇の宮廷外交～

2017(平成29)年 10月1日 発行

著 者 山崎鯛介、メアリー・レッドファーン、今泉宜子

発行者 田中 大

発行所 株式会社 思文閣出版
〒 605-0089 京都市東山区元町 355
電話 075-533-6860 (代表)

編集協力 岡部敬史 (有限会社 SPOON BOOKS)

デザイン サトウミュキ (keekuu design labo)

印刷・製本 亜細亜印刷株式会社

© T. Yamazaki, M. Redfern, Y. Imaizumi 2017
ISBN978-4-7842-1903-2 C1021